

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 30

1989年4月10日

第30号 目 次

1. 理事会報告
2. 定例研究会
3. 学術・文化情報
4. 近着会員業績
5. 事務局から
- ラテンアメリカ研究センターめぐり (16)

1. 理事会報告

第40回理事会議事要旨

1989年3月11日午後1時30分より上智大学7号館第1会議室。出席者：紹野理事長、アンドラーデ、大井、国本、清水、住田、原田、山田の各理事、計8名

○ 審議事項

1. 次期大会について

a) メインテーマである「時代区分と地域区分」について主な分野別に報告者をたて、意見を求め、コメンテーターが批判し、さらに会場からの発言を求める、b) 細野理事長に総会司会を依頼する、c) 理事会が中心となって、報告者、コメンテーターの依頼を進める、e) 各報告者の発表時間は15分とする、f) 今月末を目指して大会準備委員会がプログラムを決定する。

2. 会員名簿作成について

i) (山田理事報告) a) パソコンで原板作成、外注オフセットで25-30頁、600部を印刷するのに約30万円の予算が必要、b) アンケート未回答者は約3分の1であり、会報にも協力依頼の記事を載せるほか、会報発送時にアンケート用紙を該当者には同封する。ii) 研究会、役員選挙の目的にも会員名簿が早急に必要であることが確認され、山田案が了承された。

3. 国際交流について

i) (アンドラーデ理事報告) a) 9月21-23日に行われる米国L.A.S.A大会で“Japan, Latin America and the U.S.A.”というラウンド・テーブルが行われることになり、同理事が司会を務める。b) 出席希望者は、同理事に連絡されたい。

4. 年報編集について

松下編集委員長欠席のため理事長が代理報告。

5. 東日本研究会 (清水理事報告)

11月に東京外国語大学でラテン・アメリカ史研究会と合同で「チリの民衆音楽」などについての研究発表と討論、3月18日に上智大学で「21世紀のスラムの挑戦」についての研究発表と討論を行った。

6. 西日本研究会 (原田理事報告)

第2回研究会を12月17日南山大学で行った。次回は4月に予定。

7. 会報編集 (国本理事報告)

8. 会計報告 (山田理事報告)

9. 新入会員の件

次の新会員が入会を承認された。葛西進司 (愛知学泉大学)、藤田康子 (同)、池田年穂 (同)、東光博英 (京都外国語大学)、安原毅 (京都大学)、小川祐子 (国際協力サービスセンター)、Virginia Meza (帝京大学)、志柿光浩 (長崎大学)、木村正弘 (テレビ朝日)、丸山浩明 (金沢大学)、沼沢誠 (山形大学)

10. 理事選挙方法について

i) 原田理事よりいくつかの代替案と問題点の説明があった、ii) 次回大会総会で理事会より関係規約などの改正を提案し、承認されれば、ワーキング・グループを結成して作業を進めることになった。

— 神戸大学経済経営研究所 —

当研究所は、大正3年神戸高等商業学校の調査課として発足し、同8年に改組された商業研究所を前身としている。その後、何度かの改称を経て、昭和24年に神戸大学経済経営研究所となり、現在に至っている。

当研究所は国際経済及び国際経営に関する学術的総合研究を行なうことを目的としており、昭和57年には従来の研究部門が大研究部門制に改組され、国際経済、国際経済経営環境、国際比較経済、国際経営、経営情報システム、国際協力(外国人客員)の6部門、約20数名の専属スタッフで構成されており、国際経済、国際経営の分野では我が国でも有数の研究業績を有している。

当研究所の特色は、各教官の個人研究に加え、各研究課題に応じて所外の研究者を含めて専門委員会を組織し、積極的に共同研究事業を実施していることにある。これらの研究成果は、「経済経営研究年報」、Kobe Economic Research Review、「経済経営研究叢書」、Kobe Economic & Business Series、「国民経済雑誌」、その他刊行物に発表されている。

ラテン・アメリカ研究に関しては、神戸高商時代の先駆的な中南米研究の伝統に基づき、昭和16年に発足した金田近二教授を主幹とする「中南米経済調査室」、戦後の「南米研究会」、昭和31年の国立大学では唯一のラテン・アメリカ研究部門としての「中南米経済研究部門」へと発展してきた。

この間、半世紀にわたり我が国におけるラテン・アメリカ研究の先駆的な実態研究、移民研究の蓄積がなされてきたが、これらの研究を支えてきたのが、多数の研究所教官の渡航とラテン・アメリカ諸国の研究者の来訪であり、また「南米文庫」の拡充であった。当文庫は、昭和13年の福原八郎、野田良治両氏の寄贈図書3645冊を基礎とする、ラテン・アメリカの人文・社会科学に関するコレクションである。その質と量は内外で高く評価されており、特にラテン・アメリカの歴史研究には貴重な資料が多い。現在は一万冊を超えており、研究所の図書とともに所外からの利用者の来訪も多い。

特に、戦後から大部門制に至るまでの研究成果は、上記の定期刊行物に加えて、「中南米研究叢書」(全6冊)、「南米研究」(昭和29年-47年)が重要である。この他、ラテン・アメリカの貿易・産業構造、工業化政策、金融制度、移民史、経済統合に関する研究がなされたが、特に、昭和56年の西向嘉昭著「ラテン・アメリカ経済統合論」はそれまでの我が国におけるラテン・アメリカ経済研究にとっては画期的な成果であった。

しかしながら、近年我が国のラテン・アメリカ研究が多数の優れた研究機関で発展してきたことに伴い、当研究所が独創性のあるラテン・アメリカ研究の役割を果たすべく、機能転換が図られつつある。昭和57年に「国際比較経済部門」へと再編成されたのを契機に、当研究所の基本方針を踏まえ、環太平洋経済圏という視点のなかで共同研究を実施し、より高度な理論的、実証的研究を目指すこととなった。このため、共同研究体制の確立、国際交流の拡充、「南米文庫」や資料・データの一層の整備が進められている。また、計量分析に必要な経済データ・ベースの作成が進行しているが、現在ブラジルに関する約2千系列のマクロ経済データ・ベースが完成間近となっている。

したがって、これまでのラテン・アメリカ諸国の単なる実態研究を超えて、新しいラテン・アメリカ経済に関する研究・教育機関を目指しているといえるが、これらの課題の達成には内外のラテン・アメリカ研究者の協力が必要であり、今後一層これら研究者との交流を深めたいと思っている。

現在の当部門の具体的な研究課題は、「太平洋経済圏の経済協力」、ラテン・アメリカ諸国の「経済発展と多国籍企業」、「インフレーション」、「累積債務問題」などであり、これらの研究課題に関するいくつかのプロジェクトが進行中である。プロジェクトは、当部門のスタッフを中心として、研究所内外の研究者で組織されている。

現在(本年4月)、サン・パウロ大学経済経営学部長のRoberto Macedo氏を客員教授として招聘しており、共同研究を実施中である。(西島章次 記)

2. 定例研究会（活動報告と報告要旨）

○西日本部会活動報告 原田金一郎

本年度の部会活動の目標は、研究会の3回開催であった（昨年度は1回）。さいわい第1回研究会を京都外大（昨年9月）、第2回研究会を南山大学（同12月）の協力をえて開催することができた。第3回研究会がすこし遅れているが、4月に大阪で開く予定である。次の目標である、部会報告と年報執筆あるいは大会報告との結合は部分的にしか果たされておらず、次年度の目標としたいと思っている。ご支援ご協力をお願いします。

○トランスナショナル・エスニシティ

—1980年代パンアメリカン日系大会の事例研究— 浅香 幸枝

1981年7月から始まったパンアメリカン二世大会は2年ごとに南北両アメリカの一国で開催され、1987年には4回を迎えるまでとなった。今までの「移住記念行事」や日系社会は、移住国および日本へと目を向けていた。それに対して、パンアメリカン日系（二世）大会は国境を越え、日系人のアイデンティティと連帯を求めた。国境を越えた、出自と文化アイデンティティを共有する日系人集団の特徴はどのようなものであったのだろうか。また、こうした動きは、今日、国際化を求められている日本に対してどのような意味を持つのであろうか。4回の大会の議事録・パンフレット・案内状といった一次資料と大会関係者へのインタビューを分析の中心として、以下の順に考察した。

- 1) パンアメリカン二世大会以前の会合史
- 2) パンアメリカン日系大会の歴史と問題点
- 3) パンアメリカン日系大会と海外日系人大会との比較
- 4) 二世と日本に住む日本人との協力

パンアメリカン二世大会（後に日系大会と呼称変更）に至るまでには、1967年以来の地域的な二世同志の交流が基盤となっていた。

友好と職業別ワークショップを中心とした第1回パンアメリカン二世大会がメキシコで開催された。この第1回から第3回大会までは、戦時賠償問題での対立により各国における市民性が強調されたが、第4回アルゼンチン大会では、ようやく日本文化を自分たちのルーツと認めるようになった。すなわち「60%日本人60%生れた国の人」というアイデンティティを確認したのであった。

1957年に始まった海外日系人大会と比較すると、パンアメリカン日系大会は二世が自発的につくったものである。パンアメリカン日系大会の関係者たちは、自分たちが60%日本人であるとの立場から、経済協力ではなくて文化交流を特に望んでおり、日本文化センターの建設により、日本の歴史、日本語の普及を望んでいる。また地方レベルでは、出身母国への県費留学といった交流が機能しており、二世・三世から評判がよかった。こうした日系人の存在は、日本の国際化にとっての道標と言えるのではなからうか。

○東日本部会活動報告 三田千代子

1988年度の東日本部会研究会は下記2回が開催された。

1. 1988年11月2日（土）午後2時より東京外国語大学においてラテンアメリカ史研究会が共催して次の2研究報告が行われた。
高橋正明「チリにおける民衆経済組織」
千葉 泉「チリにおける宗教民謡—カント・ア・ロ・ディビノについて—」

2. 1989年3月18日（土）午後2時より上智大学においてDr. Eduardo Jorge Anzorenaによる「21世紀のスラムの挑戦」と題するラテンアメリカとアジアのスラムに関する報告が行われた。報告者はこの13年間、ラテンアメリカを含む開発途上国のスラムの居住環境の改善をSELAVIP（ラテンアメリカ・アジア居住奉仕団）を通じて、建築家として実践しているアルゼンチン国籍のイエズス会士であり、また年の半分は大学で教鞭をとる教師

でもある。主としてラテンアメリカを中心とする開発途上国におけるSELAVIPの活動が報告された。土地占拠によって形成されるスラムの居住環境の改善運動は今や、人間の基本的な権利である居住権の獲得運動であることが、コロンビアのSERVIVIENDA、ペルーのHUAYCANのプロジェクト、アルゼンチンのスラムを例に論じられた。また、ラテンアメリカとアジアのスラムを比較すると、いずれも住民間の相互扶助が共通した特徴として指摘できるが、住民の家族形態の概観は対照的で、アジアのスラムでは夫婦とその子供という家族形態が比較的保持されているのに対し、ラテンアメリカでは母子家庭が優性であるとの指摘があった。今回の報告を通じて開発途上国ではスラム住民の居住権獲得運動が現行の法秩序とは異なるレベルで進行していることが認識され、今後、先進諸国において低開発国の諸問題を考察するための貴重な視座を提供するものであった。

3. 学術・文化情報

i) 第15回L A S A大会

米国のラテンアメリカ学会であるLatin American Studies Associationの大会が来る9月21-23日にプエルトリコ・サンファン市のCaribe Hiltonホテルで開催される。毎大会出席者1,500名から2,000名を超えるマンモス国際大会となるが、今回は日本・ラテンアメリカ関係のセッションが2つ設けられる。大会関係のインフォメーション等についてはアンドラーデ理事(上智大学イベロアメリカ研究所)までお問い合わせ下さい。

ii) 各種研究会紹介

○大阪経済法科大学法学研究所比較憲法研究会
本研究会のきっかけは、橋本久法学部助教授による「ラテンアメリカ憲法史への模索(一)『革命のニカラグア』を読んで」(大阪

経済法科大学『法学研究所紀要』創刊号、1981年6月)であった。そこで氏は、ソモサ独裁体制を生み出した法制的背景に興味を示し、あわせてわが国における外国法研究は先進国にかたよりすぎているが、むしろ今後はまったくといってよいほど手につけられていない途上国研究こそが必要であろうという示唆をおこなった。

この指摘にたいする共感を出発点として、そもそも経済と法学の2学部を擁する大学としての特徴を生かすような研究プロジェクトの必要性を日頃から痛感していた若干の教員によって、本研究会が発足した。

もとより「途上国比較憲法研究」をテーマとするからには、やがてはアジア・アフリカにも対象範囲を広げていくつもりではあるが、成り行きからまずラテンアメリカから着手することになった。そこでラテンアメリカ各国の駐日大使館に原文提供の依頼をおこなったところ、ドミニカ共和国大使館のみ返送があった。こうした成り行きから、われわれの研究会は発足した。

いままでの研究成果としての対訳憲法は以下のとおりである。

- (1) 「ドミニカ共和国憲法」一(上)『法学研究所紀要』4号、1983年3月。(下)同5号、1984年3月。
- (2) 「チリ共和国憲法」一(上)同6号、1984年12月。(中)同7号、1986年3月。(下)同8号、1987年6月。
- (3) 「1917年メキシコ合州国憲法」一(上)同9号、1988年7月。

現在は、メキシコ憲法(下)の準備中であるが、1989年度からはニカラグア共和国憲法に進み、本年夏には現地調査も計画中である。

(研究会メンバー)

藤井紀雄、橋本久、木村惇、村下博、岩村等、杉浦一孝、古川利道、原田金一郎(以上学内メンバー)。上谷博、山中忍、長谷川憲(以上学外メンバー)。(文責 原田金一郎)

連絡先：〒581 八尾市楽音寺602

大阪経済法科大学法学研究所

○ラテンアメリカ史研究会

当研究会は、清水透、高橋正明、恒川恵市、星野妙子、高田裕憲各氏の呼びかけで、1982年7月6日に発足した。当時、諸大学において大学院生も含めて若手のラテンアメリカ研究者が育ちつつあったが、その研究活動の場は個人的な関係や学会のようなフォーマルな場だけに限られており、恒常的な交流の場となる組織がなかった。当研究会は、若い研究者層が権威にとらわれずに自由に議論できるような交流の場となることを目的として、結成されたのである。研究会の名称は「ラテンアメリカ史研究会」となっているが、研究対象を厳密な歴史学に限定するものではなく、会員の専攻分野は政治学、経済学、人類学、文学など多岐にわたっている。また当会は「若手」研究者を主たる対象としているが、それは研究姿勢のことであり、年齢制限を設けているわけではない。

現在の会員数は40数名で、東京大学、東京外国語大学、筑波大学、上智大学、青山学院大学等の院生、研究者が参加している。便宜上、数名の委員をおいているが、運営はあくまでも会員の自主的な参加によって行われている。所期の理念通り、「インターカレッジな性格を有する自主的な組織」である。

活動の中心は月例研究会で、1989年3月までに開催回数は68回を数え、6年半の間、ほぼ月に1度のペースを守ってきた。研究会では、会員の研究報告（修論報告を含む）の他に合評会やヒアリングも行っている。ちなみに88年の内容は、研究報告8本（「アルゼンチンの民族系企業の発展」「ユカタン農村の社会構造」「米国企業の地域的支配とメキシコ人鉱山労働者」「ラテンアメリカの民主化のなかのパラグアイ」「グアテマラのアルベンス政権の転覆」「サルミエントにおける野蠻の征服」「チリにおける民衆経済組織」「チリにおける宗教民謡」）、合評会1（『中米・カリブ危機の構図』）、ヒアリング2（「1988年メキシコ大統領選挙」「ブラジル・クルザード計画」）であった。このようにさまざまなテーマについて、ディシプリンやイデオロギーをこえて、開放的な雰囲気の中で自由に

発言できるのも、当会の特徴であろう。

また、1～2年に1度、会報を発行し、研究会での報告要旨および現地で研究中の、あるいは現地調査から帰国した会員の報告を掲載し、会員間の情報交換を図っている。

まだまだ多くの問題を残しているが、発足以来、当研究会は関東地方を中心とする若い研究者層の研究交流のベースとして意義ある役割を果たしてきたといえよう。

本研究会は専攻分野、年齢、居住地域等には全くこだわりません。関心のある方は下記にご連絡下さい。（文責・畑 恵子）

星野妙子 アジア経済研究所 03-353-4231

○コロンブス航海500周年研究会

一神奈川大学人文学研究所内共同研究班一
「“大航海時代”によって切り拓かれた歴史の新たな広がりや地球上に住むさまざまな人々の生活に量り知れないほどのインパクトを与え、人と人とのあいだにさまざまな関係を生み出した。コロンブスの航海500周年を目前にした今、この500年にわたる歴史の歩みとその断面を検証し直すことは、われわれが寄って立つ歴史位置を識るためにも意義あることと考える。」—このような趣旨で1986年6月、神奈川大学外国語学部の専任および非常勤教員である石井陽一（ラテンアメリカ社会学）、大林文彦（ラテンアメリカ文学）、橘川慶二（スペイン言語学）、中本信幸（ロシア文学）、藤田一成（スペイン史）、柳沼孝一郎（日本・メキシコ交渉史）、故宮井 隆（ラテンアメリカ人文地理学）、青木康征（ラテンアメリカ史）をメンバーにして会は発足した。

以来、研究書籍の購入にあたりとともに、学外の研究者にもお願いして例会を開催してきた。1) 1987年3月10日、石原保徳氏「新大陸の征服とバルトロメ・デ・ラス・カサス」2) 1987年10月28日、青木康征氏「コロンブスとトスカネリの交信について—通説の再検討」、3) 1988年2月24日、生田滋氏「大航海時代とキリスト教禁教令」、4) 1988年2月15日、柳沼孝一郎氏「17世紀前後における

日本とヌエバ・エスパーニャー政治・通商関係を中心に」、5) 1989年5月中旬予定、木村正弘氏「ガレオン貿易と鎖国一環太平洋価格革命の視点からー(仮題)」他。

研究主題は「コロンブス研究」に限定したのではない。「500年という時間の重み」にこだわり、新大陸の歴史を中心にして「世界史の構造」について、また、「世界史のなかの日本史・日本史のなかの世界史」といった問題に切り込んでいきたい。コロンブス航海500周年に関してはこれから多方面で種々の企画が進展すると思われる。われわれのチームもそれらと交流しながら活動を促進させたい。(連絡・神奈川大学人文学研究所 045-481-5661, ext. 620. 幹事 青木康征)

○メソアメリカ研究会

メソアメリカ研究会は、1980年からメソアメリカ考古学に興味をもつ人たちが集って活動を始めたが、会員が次々に中南米に研究や留学に行ったため、中断することが多かった。しかし、現在いくつかの大学の大学院に籍をおく会員が増えたこと、中南米で研究を続けている会員の研究発表の場をつくることなどの理由で、'88年秋正式に発足することに決定した。

メソアメリカと名付けたが、決して研究対象をそこに限ってしまうつもりはなく、研究会の中心が人類文化を展望する上での視点をメソアメリカ文化に求めていることからの命名であって、会員の中には、日本、エジプト、オセアニアなどを研究対象とする人もいる。つまり、メソアメリカ研究に活動の中心をおきながらも常に他地域の諸文化と比較できる複数の視点を持つことを目標としている。専門分野も考古学、民族学、言語学、文献史学などさまざまであるが、いずれもフィールドを持つ分野であり、フィールドで一次資料を得て研究することを常に念頭においている。

現在、月1回の例会の他に、メソアメリカの遺跡集成、民族・言語地図、絵文書集成の作成を目指してデータ収集・整理が進められている。また、京都文化博物館と共同して「考古学マニュアル」の作成を計画し作業を

進めている。このマニュアルは、日本考古学の紹介を兼ねた中南米考古学のための手引きで、日本語、スペイン語、英語による出版を目指している。

会報は年4回の予定で、海外会員からの最新情報、エッセイなどを内容とし、研究の成果は年1回を予定している会誌に発表することを計画している。

研究会は、研究活動に参加する会員、海外で研究している会員、賛助会員から成り、現在約50名を数えるが、とくに賛助会員が増えつつある、また、3会員が今年海外に留学し、2会員が帰国することになっている。

(文責・大井邦明)

連絡先(郵便でお願いします)

京都市右京区西院笠目町6

京都外国語大学 大井邦明研究室

4. 近着会員業績

[抜] 角川雅樹「ラテンアメリカにおける大学生のMMPI」(『東海大学保健管理センター年報』1987年)。

[抜] 角川雅樹「『メキシコ精神医学会』—第10回メキシコ精神医学会の報告から—」(『東海大学保健管理センター年報』1987年)。

[籍] Malinowski, Bronisaw and Fuente, Julio de la, (信岡奈生訳、黒田悦子解説)『市の人類学』平凡社 1987年(原文題名: Malinowski in Mexico: The Economics of a Mexican Market System, 1982)

[抜] 宇佐見耕一「ブンヘ・イ・ボルン・グループの百年—アルゼンチン最大の民族系企業グループの歴史—」(『ラテンアメリカレポート』, アジア経済研究所, Vo. 5, No. 2, 1988年)。

[籍] 吾郷健二『第三世界論への視座』世界書院 1988年。

[抜] 田島久歳「転換期のパラグアイ経済」(『ラテン・アメリカ時報』, ラテン・アメリカ協会, 1988年8月10日号)。

[籍] 福島正徳 *Eleitores e migrações internas no Brasil: o caso paranaense: 1900-1984, Curitiba, 1988.*

訃報

会員山蔭孝夫氏（京都産業大学助教授・ラテンアメリカ現代文学）が昨年11月19日に気管支ぜんそくで急逝されました。享年41歳。氏は大阪外国語大学大学院を修了され、関西大学などで非常勤講師をされた後、昭和49年に京都産業大学専任講師となり、同54年より現職にありました。アンデス諸国の現代文学に関心を持っておられた氏は、バルガス・リョーサの作品などの翻訳を残されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

訃報

会員宮井隆氏（神奈川大学教授・人文地理学）が去る2月7日急逝されました。享年56歳。氏は大阪市立大学大学院を修了され、近畿大学などの非常勤講師を歴任されたのち、昭和53年に神奈川大学助教授となり、同59年より現職にありました。氏が企画されていたアンデスの土地制度に関するフィールドワークを実行することなく急逝されたことは誠に残念であり、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

〔抜〕 福元雄二郎「ブラジルにおけるコーヒー栽培地域の推移」（『神大附属研究紀要』2, 1988年）, pp. 31～46

〔籍〕 田島久歳 *Historia del Paraguay del Siglo XIX: 1811-1870* (Asunción, 1988, Serie Historia Social, Centro Paraguayo de Estudios Sociológicos)

〔誌〕 「東海大学保健管理センター年報」第18号（1987年）

〔誌〕 「人間の場から」第13号 1988年

〔誌〕 「メキシコ研究センター通信」12号（1988年11月 京都外国語大学メキシコ研究センター）

〔誌〕 Boletín Informativo, No. 34 (diciembre de 1988, Instituto Iberoamericano de la Universidad Sofía)

〔誌〕 Publicaciones disponibles para canje, Lista no. 19 (diciembre 1988, Instituto Iberoamericano, Universidad Sofía)

〔冊〕 Ibero-American Institute Library, Accession List, Sophia University

〔冊〕 ラテンアメリカ資料センター「エクアドルの民話『エツァと巨人』」（1988年6月）

〔冊〕 JAPAN-LADOC「アマゾンの民話」（1988年8月第6特別号）

i) 新入会員

5. 事務局から

IV) 会費納入・会員名簿アンケートに協力を
現在までに会費納入、アンケート返送に
協力された会員は、それぞれ全会員の3分
の2にとどまっています。該当者には、振
込用紙、アンケート用紙を改めて同封しま
すので、学会の活動を支えるため、この機
会に是非ともご協力下さい。

No. 30 1989年4月10日発行
〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学社会工学系細野昭雄研究室内
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎0298-53-5067